

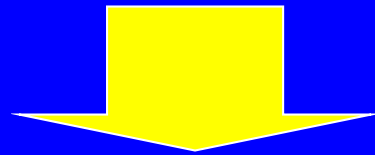
二重課題での評価と 転倒との関係

老健通所リハビリ

PT 宮島 政靖

はじめに

当通所リハビリセンターでは、一度に多くの利用者がリハ室に来て移動や歩行訓練を行なっている

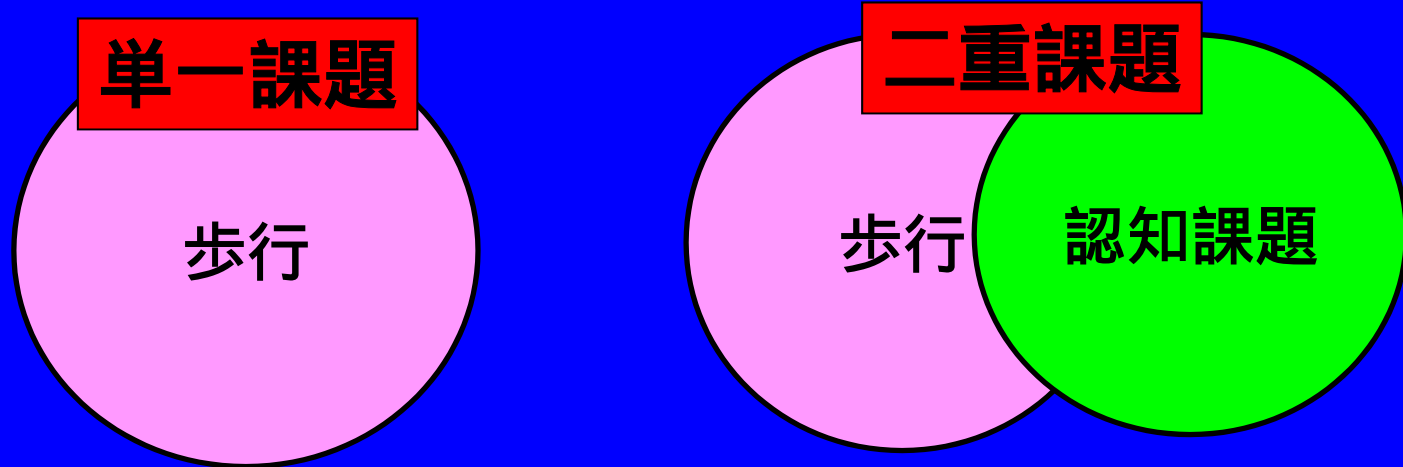


複数の課題が同時に課せられる状況になっている

例えば、移動中に目の前を他利用者が横切る・話しかけられるなど...

目的

複雑な課題環境下での評価の方が日常生活により近いものではないか



目的：二重課題条件下での歩行と転倒との関係を明確にし、二重課題条件下での評価が有用であるかを検討する

対象

当施設にて通所リハビリを受けており、独歩あるいはT字杖を用いての歩行が自立または監視レベルの者

課題(野菜の名前をできるだけ多く言う:HDS-Rの語想起1点以上)が安静座位でも困難であった者は除外

対象者の過去1年間の転倒経験の有無について調査し、転倒群と非転倒群に対象者を分類

対象

	人数(男: 女)	年齢	HDS-R
転倒群	10(0:10)	87.8 ± 3.6	24.8 ± 4.0
非転倒群	10(2:8)	82.3 ± 4.4	22.3 ± 3.8

方法

- ・課題を与えない10m自由歩行 (Single-Task:ST歩行) 速度と歩数
- ・歩行を行ないながら課題を遂行する10m二重課題歩行 (Dual-Task:DT歩行) 速度と歩数
 - 後方のスタッフに聞こえる程度の声量を指示する
- ・ST歩行は2回、DT歩行は1回の計測を行い、ST歩行は平均値を採用した
 - 各計測間に1分間の休憩を入れる

結果

群内のSTとDT平均歩行速度の比較

単位:sec

	ST	DT
転倒群	22.7 ± 6.1	31.2 ± 8.4*
非転倒群	16.01 ± 5.3	20.5 ± 4.3

*:p<0.05

結果

群内のSTとDT平均歩数の比較

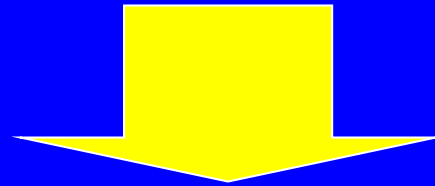
単位：歩

	ST	DT
転倒群	34.3 ± 6.6	41.6 ± 8.2*
非転倒群	28.2 ± 6.8	32.1 ± 5.9

*:p<0.05

考察

- DT歩行では、転倒群で歩行速度の低下・歩数の増加が有意に認められた



松田ら「歩幅を減少させることで体重移動を少なくし、歩行時の安定性を確保していた可能性が考えられる」

考察

多くの利用者が利用している
リハ室での転倒リスクは高い

- 転倒群では、日常生活のなかで自身の歩行に向けられる注意量が増大している
- 転倒歴のある利用者の注意をそらすようなことをすることは転倒リスクを増大させてしまう

考察

- 訓練として複数課題条件下で行うことも良いのではないか
- DT歩行を評価し動作の変化を観察し分析することで、生活場面への提案もできると考える

まとめ

- DT歩行は転倒に対する評価の一つとして有用であると考え
- 利用者にとって当通所リハビリセンターのリハ室内の移動や歩行訓練は、転倒リスクが高い状態であることをスタッフ間で意識する必要がある
- 今後は、DT歩行能力を高める検討も行い、それによって転倒が減少するかを検討していく必要がある

ご清聴ありがとうございました

参考文献

- 松田 淳子,他:計算課題が脳血管障害者の歩行動作に与える影響 PTジャーナル39:373-378,2005
- 山田 実,他:二重課題条件下での歩行時間は転倒の予測因子となりうる 理学療法学22:505-509,2007
- 島 浩人,他:加齢による二重課題バランス能力低下と転倒及び認知機能との関連について 理学療法学24:841-845,2009
- 市橋 則明(編):高齢者の機能障害に対する運動療法 文光堂 2010